

平成22.12.25

- ・松陰敬仰の気運醸成
- ・松陰精神の継承普及
- ・松陰数学の研究振興

○編集発行 財団法人松風会
〒753-0072 山口市大手町2-18
山口県教育会館内 TEL・FAX 083(922)1218
<http://www9.ocn.ne.jp/~shohukai/>

松 門

松陰先生に学ぶ読書会を



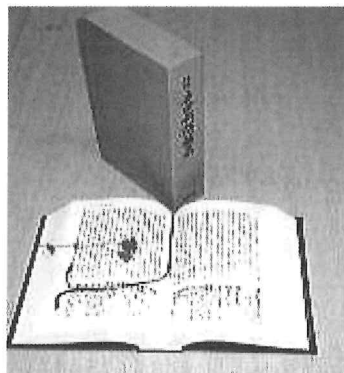
財団法人松風会
理事長 河村 太市

昨・平成21年10月27日は、松陰先生殉節150年目に当たっており（1859年10月27日没）、続く本年8月4日は、松陰先生生誕180年目で、松陰神社ではそれぞれ大祭が斉行されました。取り分け、昨年の大祭に合わせて、松陰先生関係の宝物を保管・展示するための「至誠館」が、松下村塾の向かい側に瀟洒な姿で建設されましたことは、まことに意義深く素晴らしいことでした。

さて今日、松陰先生を敬慕し、先生に学ぼうとする人びとは少なくありません。先生ご自身の著作や書簡を学ぶ者、あるいは先生について書かれた研究者、伝記、あるいは小説などを読んでおられる方など、先生への接近の仕方、学

び方は様々であります。そうした学び方の一つに、複数の仲間による読書会があります。構成員の数は、2人の場合から10人内外の場合まで様々です。複数の仲間と読むことは、それなりの利点があります。ひとりで読む場合は、自分の力の範囲で読んでいくわけですが、複数の人によるときは、それなりの複数の力でもつて読んでいくわけです。「これは

【吉田松陰撰集】



そういうことなのか」、「そういう見方も出来るのだな」などと新しい発見があるものです。読書会の最大の利点であり魅力だといえましょう。また次のようなことも利点といえましょう。それは、仲間に連れられ中断が防げることです。

一つの例を紹介しましょう。防府松陰研究会（小川善博会長）では、松風会著作の『脚注・解説 吉田松陰撰集』が発行された直後の平成8年4月26日から同書を読み始めました。毎月1回（2時間）の会合を続け、平成21年8月28日に全巻717頁を読了することが出来ました。この大冊も、誘い合いのおかげで、中断することなく、兎も角も読了出来たのです。なお、先に紹介しました防府松陰研究会の小川善博さんは、松風会主催の「松陰研修塾基礎コース」には欠かさず出席されていることも、防府の読書会が長続きしている要因の一つでありましょう。

現在、山口県内の松陰先生に学ぶ読書会としては、萩市、美祢市、防府市などがあります。この外にも各所にあったように、松陰先生に学ぶ読書会が、各地で開催されるようになります。もし読書会設立のご意思がありましたら松風会にその旨をご連絡ください。松風会としても、微力ながらも、お役に立ちたいと願っているところでもあります。

【松陰研修塾講義の様子】



書籍紹介

『松陰の現代化』著者 田中国重

(鹿児島県与論町教育長)



標題紙裏に「謹んでこの書を、私淑の人吉田松陰先生と佐藤薫先生、そして、萩の街を案内され、松陰への私淑の念を一層強めていただいた、我が師、大野連太郎先生の御霊に捧げます。」とある。また、佐藤薫氏著『吉田松陰』に出会って以来、35年間のささやかな教育実践をまとめたところ。

その中から、第四章の一部(p257~275)を著者の了解を得、次に紹介する。

第四章 松陰の現代への提言

一 人間として

(1) 親子の絆を大切に

近年にわかに、「親殺し」「子殺し」「子ども虐待」といった、悲しい事件が後を絶ちません。とりわけ頭から離れないのは、「父親をハンマーで撲殺」とか、「母親の首をのこりて切断」といった事件。百五十年前の幕末の日本では、とうてい想像もつかなかったような事件であり、慄然とします。

確かに以前から、子どもへの虐待や親らしからぬ親に対して、子どもに殺されて当然

があります。発達段階に応じて、親は親としての責任を果たし、子は子としての義務を果たす。そこに自ずと、親子の深い絆が結ばれることを教えています。このごく当たり前の「親子の絆を大切にすること」が、この国を浄化する第一歩であります。

「親思う心に勝る親心」。人の子たる者、人の親たる者、私・松陰のこの心情、おわかりになりますか！

(2) 生かしてもらっていることの自覚を

我々生身の人間は、今日一日元気で活動できたことを当たり前前と思い、明日も当然今日と同じように生きて活動できると思いこんでいます。ところがある日突然、怪我したり病気になるったりしたとき、改めて健康の有り難さを実感するものです。否、実はそのような実感をさせるために、創造主は意図的にそれぞれ必要な怪我や病気の体験を仕組んでくださっておられるのです。

そこで皆さん、怪我や病気のお世話になる前に、次の二つの体験を通して他のお陰・他のお世話になって今生きて

いる、否生かしてもらっていることを実感して自覚し、自ずと他への深い感謝の心を忘れずに、謙虚に生きてもらいたいと思うのです。

その第一の体験は、あなたの肺いっぱい空気を吸い込み、そして、そのまま息を止めてください。さあ、あなたは、どれぐらい止めることができますでしょうか。せいぜい一分前後です。もしあなたの周囲に、おいしい空気がなかったら、おいしい空気はなかったら、そしてあなたの肺が機能しなければ、あなたの命は一分前後でおさらばです。次の体験は断食体験です。皆さんは下痢等で、食を抜いた体験があるかと思いますが、私も野山獄で、二日だけでし

与論島



たが断食の経験があります。与論町弓道連盟では、中・高生の弓道部員も含めて、朝食・昼食抜きで断食百射会を実施しておられると聞き、大変結構なことだと思います。このような体験を通して、改めて食事のおいしさ・有り難さが実感できるのです。そして我々人間は誰でも、毎日他の動植物の命をいただいて生きていることに気付きます。だから謝罪と感謝を込めて、あなたの命をいただきさせて「いただきます」と言うのです。

だから我々は、他の食材の命を犠牲にして生きていることを自覚し、動植物をいたわり、食材を育ててくださった方々、食事を作ってくださいた方々等に感謝して、一つでも二つでも御恩返しをして逝きたいものです。

(3) 今に生きよ

今もこうして、生かしてもらっていることを実感できている人は、刻一刻と過ぎ去っていく「今」を決して無駄にはしないでしよう。しかしお互い生身の人間故に、しばしば怠け心が頭をもたげます。その点私の兄梅太郎も、私が数え十三歳の時の元日、私と

一緒に毎日通っていた叔父玉本文之進先生の塾に行こうとしたとき、「今日だけは休もうではないか。」と言ったことがありました。それに對し私が、「兄さん、元日も一年のうちの一日ですよ。」と言ったことが『松陰読本』の中で紹介されています。その気持ちは、生涯変わりませんでした。だから晩年、高杉晋作に宛てた書簡の中で「死して不朽の見込あらばいつでも死ぬべし、生きて大業の見込あらばいつでも生くべし」という死生觀に達したのです。

その点、現在の若い人たちは、あまりにも時間を浪費し過ぎていくようで、残念でなりません。確かに近年日本人の平均寿命は年々伸びて、平成二十一年の女性は86・05歳で24年間連続世界一、男性は79・29歳でアイルランドの79・40歳に次いで二位となっており大変喜ばしいことです。しかしどうもそれに安住して、若い中学生・高校生までがのんびりしていることが気がかりです。刻々と過ぎ去る「今」の積み重ねが一日であり一年であり、その人の一生であることをできるだけ早い時期に

わかってもらいたいです。その点、与論町の校長会・教頭会の合い言葉が「ニヤマドーヤー、ヒュードローヤー」(今こそ・今に最善を、今日こそ・今日に最善を)となっており、それを職員や児童生徒に常に意識付けておられるというところで、大変ありがたく思います。

人生の差はつまるところ、能力差でなく「今をどう真剣に生きるか」の積み重ねの差だと思ふのです。

(4) 過去を肯定し、誠実に生きよ

その日その時を真剣に生きてきた結果が、あなたのこれまでの人生です。しかし、真剣に對処しても、世の中一人で生きていくわけではないので、すべて思い通りにはいきません。否むしろ、思い通りにいかないのが常です。そこでそれをどうとらえ、どのように對應していくかが極めて大切なのです。いつまでもくよくよ考え愚痴を並べて生きるか、あきらめてそこで立ち止まってしまいか、それの一つの生き方です。しかし、精一杯真剣に生きていたなら、結果がどうであれそれはいい

のです。少々怠けて、あるいはふざけて失敗したとしても、自分がしでかしたのですから、それはそれでいいのです。

大切なことは、結果の善し悪しにかかわらず、すべての過去を肯定すること。迷いがあれば、見方を変えて見つめ直してみる。これを転命と言います。私は下田の平滑の獄舎に一回・江戸伝馬町の獄舎に二回・そして郷里萩の野山獄舎に二回投獄されました。

しかし、私自身やましいことは一つもなかったと確信していましたから、少しも悔いることもありませんでした。常に、すべての過去を肯定し、獄舎にあつては獄舎でできること・獄舎でしかできないことをして楽しみました。特に、下田の平滑獄は一畳敷きと大変狭く不自由でしたが、獄の番人から本を借りて読み、番人や獄卒に天下の情勢を語って彼らの感動する様子に喜んだものです。また野山獄では、私の講義に加え獄囚それぞれの特技を引き出し、他の囚人に指導させることにより、次第に楽しい学園に変わっていききました。

このように、いかなる状況

にあろうとも常に前向きにとらえ、すべての過去を肯定し、誠実に生き、そして常に自己反省に徹する。

「至誠至不動未之有也」これはもともと孟子の言葉ですが、私・松陰の人生訓です。

二 教師として

(1) 教える志がありますか

世に「デモ・シカ先生」という言葉があります。いつ誰が言い出したかは不明ですが、誠に悲しく寂しい言であります。「先生にデモなるか」「先生にシカなれなかつた」とかいったような人が、給料をもらう手段として先生になった人のようなのです。このような人に教えられる児童生徒は、誠にかわいそうです。

私・松陰は、『講孟余話』の中で「必ず真に教えるべきことありて師となり、真に学ぶべきことありて師とすべし」と書きました。まず、「先生」と「師」の違いから考えてみましょう。現在は同義語のように遣われておりますが、基本的に「先生」は「先に生まれた人」ですので、特別な資格や免許を持たなくても、誰でも「先生」になれるわけ

です。「デモ・シカ先生」もその部類に入るのかも知れません。しかし「師」は違います。

『新字源』によりますと、「師」は会意形声文字で、左部分是人間の居住する丘の形象で集団や居住地の長の意。右部分

はシの音を加えて指導者の意を表します。そのことから、教師の第一の条件は、真に教えたこと・教える志を持たなければならぬということです。指導要領に示されているから、教科書にあるから教えるということではなく、「この子たちが将来生きていく上でこのことは是非学び取らせたい・今教えておかないと生涯取り返しがつかない」と、教師自ら指導要領にある指導目標や内容を、主体的にとらえ直すことが大切です。

世の教師たる者、ここで改めて教育のプロとして、「自分は、この児童生徒に真に教えること・教える志があるであらうか。」と、自ら問い直してもらいたい。志があれば、その方法は自ずから見い出せるはず

(2) 児童生徒に対する敬愛の情は?

東京オリリンピックの年とい

うことですので、既に四十五年前のことになりますが、第二部で川淵キャプテンが紹介された「日本サッカーの父」と言われたドイツ人のクラマールは、日本代表選手が勝つても負けても必ず第一声は「ジェントルマン」と呼びかけられたとのこと。大変感動しました。世界的な名サッカー選手であり名コーチと称えられたクラマール氏も、当時の日本代表選手に対して私の教育信条である敬愛の情をもつて指導されたことに敬服し、国境を越えて大変親しみを感じます。

- 私も、野山獄や松下村塾の同志同門の皆さんに対し、
- ① 平等の存在
 - ② 善性を内包する存在
 - ③ 掛け替えのない個性を有する存在
 - ④ 日本民族の子
 - ⑤ 同学同門の徒

と認識し、一人ひとりに対して深い敬愛の情をもつて接してきました。時代を超え国境を越えて、教師として常に心がけなければならぬことだと思えます。

近年、体罰事故や罵声(のざ)が問題になっているようですが、

もう一度、当該児童生徒に対する右の①～⑤の基本認識にたった深い敬愛の情が注がれているか、しっかりと内省してもらいたいと思います。

義務教育が制度化された現在、教師が児童生徒を選ぶこともできなければ、児童生徒が教師を選ぶこともできません。それだけに、右のことをしっかりと繰り返し繰り返し、厳しく内省することが肝要であります。

(3)「個性」ということで野放しにしていますか

近年各地の飛行場やホテル、各種職場のカウンターで、どうも気になることがあります。それは、男女を問わず受付をしてくれる若い皆さんの鉛筆やボールペンの握り方です。親指が突き出た握り方、人差し指を親指で押さえつけた握り方、親指・人差し指・中指で鉛筆を握り、薬指で支える握り方など様々です。それでも明るい笑顔でちゃんと受付用務をこなしているし、他人に迷惑をかけるわけでもないで、それも個性と認め「みんな違ってみんないい」ということで、家庭でも学校でも指導が加えられないまま、野

放しになっているのではないのでしょうか。

これは、文字を正しく・早く・美しく書かせるために、小学校一学年でしっかり教えることになっています。「入学前に悪い癖が付いて直せない」という。それでもなお、一学年担任の責任において、是非身につけさせてもらいたい。「隗(かい)よりはじめよ」という金言があります。身に付いていなければ、他学年でも是非その都度！

確かに、子どもたちは十人十色。それぞれ持ち味があり、個性があります。その中で、非社会的なもの・反社会的なもの・好ましくないものはタイミングよく適切に矯(た)め、正しいこと・よりよいこと・社会的に価値あることを認め励まし、より大きく育ててもらいたい。いわゆる存在の個性から価値的個性へ個性の純化を図ってもらいたい、歳とともに時代とともに輝きを増す児童生徒の育成に励んでいただきたいと思うのです。

(4)「この子ども・学校・地域のために我はここにあり」とこの自覚を

毎年四月一日には、国内の

各都道府県で教職員の人事異動が行われています。教師の側から見れば、希望地赴任・希望地外赴任・希望地特定なしでの赴任と、人それぞれであります。そもそも「人事」というのは「ひとごと」であり、他人が総合的に判断して行うわけですので、希望通りいくはずはありません。

一方子どもの側から見ますと、人事異動が行政で行われるようになり、私が「師道論」で述べた(山口県教育会編『吉田松陰全集』第三巻p138)ように、「・・・妄(みだ)りに人を師とすべからず、・・・眞に学ぶべきことありて師とすべし」というわけにはいかなくなり、自分で教師を選べなくなりました。それ故、どこの地でも子どもたちはひたすら、「今度赴任してこられる先生はどんな先生だろうか。」と、首を長くして待っているのです。それだけに、どこの地であろうと子どもたちが待っていますので、喜んで子どもや保護者の皆さんとの出会いを楽しみにして、赴任してもらう必要があるのです。

鹿児島県立高校六校の校長歴任後、東串良町と与論町の

教育長を務められた故益田元甫先生は、与論町に赴任された教職員の歓迎会ではいつも、「土地に惚れ、人に惚れ、仕事に惚れよ。」と励まされたとのこと。私の「松下陋村(ろうそん)と雖も、誓って神国の幹(みき)とならん。」の気概に通じると思います。

最近の先生方の中には、往々にして自分のために児童生徒や学校があるように錯覚している方もおられるやに聞くことがあります。とんでもない誤った認識であります。教育公務員としての教師たる者、基本的に「この子ども・この親・この学校・この地域のために、我はここにあり。」ことを忘れずに、子ども・保護者・職員地域の方々との出会いを大切にして感謝し、日々の教育活動に全力を尽くしてもらいたいと思うのです。

(5)教師としての資質向上に努めよ

「伸びる者・学ぶ者のみが教える資格がある」という金言があります。正にそのとおりで教職員の皆さんは、毎日の授業のために児童生徒の実態把握・教育内容や方法の研究・教材や教具の工夫等々と、日々教材研究に励んでおられ

ることと思います。それはそれで大切なことですが、特に私が強調したいのは次の三点です。

まず第一は、「自分が指導する教育内容についてエキスパートたれ」ということです。分かったこと・できるようになったことをすべて教えるということではなく、その中から精選して、指導する児童生徒の実態に合わせて高度な内容をやさしく、楽しく指導してもらいたい。かつて佐藤薫氏は、氏の名著『吉田松陰』の中で、「これからの幼・小・中・高の学校には、博士号を持つ教師が割ぐらい存在すること」を望んでおられました。

第二は、教師は教えるプロです。「教育技術を徹底して磨いてもらいたい。」ということです。この教育技術について、さきの佐藤薫氏は次のように定義しています。「各教科・道徳・特活等の授業及び生活指導全般にわたる、教室の内外のあらゆる場、あらゆる機会を通じて、一人ひとりの子どもの魂の琴線に共鳴を引き起こし、日々生き生きと望ましい人間への自己形成に

立ち向かわせるよう適時・適確・適切に教え導く技術である。」と。誠なるかなこの言。でもなかなか難しいことですが、日々精進を重ねてもらいたいと思います。

第三は、不易である第一と第二の資質に加えて、現在そして未来永劫人類が生き延び発展し続けていくための「環境教育」に対する幅広い知識と指導技術。そして限られた人生をより充実させ、より豊かにするための情報機器の有効活用と、その問題点への適切な対応のための自助努力。そしてそれらの知識・技能を、日々の教育実践に生かしてもらいたい。この二点は、いわゆる流行に対応するための極めて重要な資質であります。

(6) 義務教育九年間の最大の課題は？

「義務教育九年間の最大の課題は？」と聞かれると、あなたは何と答えますか。「人格の完成」「生きる力の育成」「学力向上」「基礎・基本の定着」。確かにどれも大切な課題ではありますが、十分条件とは言えません。

私・松陰は、これまでいろいろなところで、「志を立て

て、以て万事の源と為す」と述べてきました。やはり、義務教育九年間の最大の課題は、一人ひとりの児童生徒に、それぞれ明確で具体的な「夢を育てる」ことだと思っています。

「人格の完成は生涯の課題でしようし、「生きる力」はどのようなに生きるかが問題でなし、「学力向上」も「基礎基本の定着」も、明確な夢実現と結びつかないと時間と共に忘れ去られていくでしょう。勿論小学校の下半年においては、学ばふ楽しさ・できた喜びを味わわせることで十分です。しかし、小学校上学年から中学校においては、それぞれの夢をしっかりと育て、その夢実現のために自ら学ぶ態度・能力を培い、中学校卒業段階では、自分の夢実現に向けた進路を明確にして高校進学等の決定をしてもらいたいのです。

なお、自分の人生を自ら築く手立てとして、小学校二年の生活科「大きくなったわたし」を出発点として、小学校六年の歴史学習の導入単元で、松陰の年譜を参考に「私の年譜」を作らせる。そして松陰の半生に当たる中学三学年の道徳で、「私の年譜」

を振り替えさせることが大切であります。

当然のことながら、「夢を育てる」ことは、担任や学校だけではできません。その子の命名に託された親の願いや誕生から現在までの生育歴、その過程で形成されたその子の特技・特性・能力などを熟知しているのは両親であり家族です。「思イドウ運命」の真意を親も教師も理解し、連携を図って育ててもらいたいと思うのです。

三 教育管理職に対し

(1) 明確な目標を示せ

「担任が代われれば子どもが変わり、校長が代われれば学校が変わる」まさしく至言であります。担任ならば、教える志（情熱）があり、指導目標を明確にして指導内容や技術を熟知し、指導法を工夫すれば子どもが変わります。「志を立てて、以て万事の源となす」、この名言は、個人としての生き方のみでなく、担任としての学校経営において、極めて大切であります。

それぞれの学校には、ほとんどの場合、伝統的な校訓な

り校是があり、それに基づく教育目標があります。その教育目標に照らして、自校の児童生徒や地域の実態を明らかにし、数年間の重要課題、そして単年度の最重要課題を明確にします。いわゆる学校経営目標の明確化であり、これが教育管理職の最大の課題であります。

第三章の二で述べた当時の那間小学校の校是は、「誠実・向学・開拓」であり、教育目標は「徳・知・体の調和がとれ、自らの夢と目標を持ち、その実現のために、自ら進んで学び・行動する那間小学校児童の育成」でありました。そして、重点課題は「真心のこもった明るいあいさつ運動、自然の中で読書いっぱい・知恵いっぱい運動、気力・体力いっぱい運動、為せば成る！夢実現運動」であり、単年度の最重要課題は、「場に応じたあいさつ運動」と「発表や質問で始まる学習指導法の改善」でありました。しかもこの四つの重点課題の頭文字は、児童・保護者・地域にとってなじみが深く、したがってみんなが覚えやすいように、学校所在地の地域名「増木奈」の

語呂に合わせた「ましきな運動」でありました。

筆者は、勤務させてもらった四校（併設校・分校を合わせた七校）の校長時代の重点課題を、常にこのように心がけてきました。一校目の芦花部小・中学校では、「芦花部一番」という美女伝説に因んで「あしけ部一番運動」（あは、あいさつ一番運動、しは、読書いっぱい・知恵いっぱい運動、けは、花いっぱい運動、部は部活一番運動）でありました。二校目の東城小・中学校・和瀬分校では、東城校区の奥にあり、校歌にも歌い込まれた最も高い、たかばち山に因んで「たかばち運動」、三校目の平川小学校では「ひらかわ運動」、そして四校目の那間小学校では「ましきな運動」であります。

（2）組織人としての自覚を促す

筆者は校長時代、四月当初の職員会議では必ず、「一隅を照らす者、これ国宝なり」という日本天台宗の開祖である伝教大師・最澄の名言を伝えてきました。これは、現在も比叡山根本中道（延暦寺）に残されており、組織人一人ひとりの使命と自覚を促す言葉として至言だと思っています。校務分掌に基づいて、職員それぞれが、それぞれの役割をきちんと果たし、さらに進んで他への協力体勢ができたとき、学校全体が輝き、児童生徒それぞれが輝き、そして教師一人ひとりが輝くのです。公教育に携わる教職員にとつて、人事異動は付きものであり、校務分掌の割り振りも当然です。人事異動や校務分掌が決まるまでは、本人の希望や意見も聴いて、最善の調整は必要であります。しかし一旦決まったら、「この学校のこの分掌は、あなた以外にはいない、あなたが是非必要なのだ」ということを、優しく厳しく説得して当人の自覚を促し、使命感をもってその一隅を照らすよう仕向けることが、管理者の責務であります。

（3）服務指導は厳しく、職員とその家族を守るために、近年、教職員の不祥事が後を絶ちません。不慮の事故は仕方ないとしても、飲酒運転や体罰事故、窃盗やわいせつ行為等々、人間として自らを律する自己統制力が疑われます。児童生徒を指導する立場

にある教職員、とりわけ教職員を指導する立場にある校長・教頭の事件・事故など、言語道断であります。

教師たる者、児童生徒に各教科の知識・技能を教える前に、まず人間として人様に迷惑をかけないこと、社会のルールを守ること、このことは初任地への赴任当時から、繰り返し繰り返し繰り返している服務の宣誓を繰り返しているわけです。それにもかかわらず、事件・事故を起こすということとは、誠に情けないことであり、全て免職に処すべきだと松陰は考えます。

しかし、他の命をいただいて生きている罪深き生身の人間ゆえに、その時の心理状態と、その人が置かれたその場の状況によつては、誰でもあらゆる行動を起こし得るといふ、自分を含めたすべての人間に対する基本認識を、誰もがもつ必要があると思うのです。このことをK・レヴィーンという心理学者は、B I F (P X E) という数式で表しています（東京大学出版会発行高木貞二編『心理学』p9）。Bは行動、pは個体、Eは環境。すなわち人間の行動は、

環境と個体という二つの変数の関数で表すことができるというのです。さすがに、心理学者！複雑怪奇な人間行動の妙をとらえた理論だと今でも敬服しています。管理職にある者は、管理職手当の代償として、この理論を所属職員一人ひとりにしっかりと指導して、平素から個々人の規範意識・実践意識を高め、自己統制力の効く職員に育ててもらいたいと思います。この指導が不十分で、所属職員が事件・事故を起こしたなら、その責任は校長自身がとるべきだと、私・松陰は考えます。

（4）八月一日を「国民断食の日」に

与論町教育委員会では、これまででも社会教育の重点課題の一つとして八月一日を「町民断食の日」と定め、町教育委員会便り「誠風」で全町民に広報し、第三部で紹介した与論町弓道連盟を中心に推進しております。

なぜ八月一日かと言いますと、昭和二十六年（1956）年のこの日は、奄美大島日本復帰協議会議長の泉芳朗氏が、現奄美市の高千穂神社拜殿で五日間の断食悲願を始めた初

日なのです。断食中に氏が作った「断食悲願」の詩の、特に四節「よしや骨肉ここに枯れ果つるとも：祖国帰心五臓六腑の矢を放とう」という「アジア民俗の伝統的な意志表示の手段であり、知性の許す限りにおいて、ぎりぎりの反対意志表明である」（名瀬市教育委員会編『戦後の奄美教育史』p117筆者執筆）という氏の反骨精神を追体験し、日本復帰に対する氏の思いや情熱を偲び、氏を中心とする一連の復帰運動によつて祖国復帰が実現し、現在の豊かな生活ができていること、併せて食のおいしさ・有り難さを体感し、食材に対する懺悔と感謝の心を養うためであります。

しかし、物の豊かさに恵まれた現在、食材に対する懺悔、そしてそれらもろもろの命に対する感謝の心を育てるといふことは、第三章の五の実態からも明らかのように、なかなか難しい実情にあります。米も野菜も豚肉・牛肉・山羊肉・鶏肉ですら、すべて「食べ物」すなわち「物」と見なし、命が宿していたことに気付いておりません。飼育して初めて「学校の山羊でなく、

スーパーから買ってきた山羊肉を」という認識まで高めることができたのです。それでもなお、スーパーの肉の命まではないが及んでおりません。現代教育の歪み、ひいては現代社会の悪の根元は、この基本認識に基づく感謝の心と、使命感の欠如にあると思うのです。

に育てられたために、孤児院に来てから三年半（およそ十歳半）の間、昼間は部屋の隅でうずくまり、夜になると四つんばいで歩き回り、食事は両手両膝をついてぺちゃぺちゃ舐め、死んだ鶏の内臓をつかみだして引き裂いて食べ、夜中には遠吠えをし、勿論人間の言葉は聞き分けることも話すこともできません。完全にオオカミとして育っていたということですが、

四 父母に対し

(1) 教育の原点は家庭

父母の皆さんは、昭和四十二年にアメリカのA・ゲゼルという実験心理学者によって書かれた『狼にそだてられた子』という本を読まれたことがあるでしょうか。インドのカルカッタの山奥で、オオカミにさらわれた少女が、七年間洞穴の中でオオカミに育てられた後、補護隊によってお

「三つ子の魂百まで」ということわざがあります。時実利彦博士の脳の研究でも実証されたように、環境によって形成される人間の高等な精神作用はもとより、遺伝の影響を強く受けるとされる心の作用も、環境によってかなり左右されるといえるので、やはり「氏より育ち」です。

生まれ育ちが異なる男女の間に生まれ、良くも悪くも無限の可能性を秘めた世界中でたった一人の赤子、それがあなたの子供でもあります。その掛け替えのない唯一絶対の、あなたの子どもの未来を左右するのは、あなた夫婦であり、あなたの方の家庭です。世の父母

は、このことを改めて自覚し、心して育ててもらいたいと思うのです。

(2) 十歳までは父母の両手の中で

生まれたばかりの赤子は、何も分かりません。お乳を飲ませ、食べ物を与えてくれる存在を自分の親と信じ込んで慕い、その一挙一動を真似るのです。人間の子として生まれても、オオカミに育てられれば「オオカミ少女」になるのです。このことから、改めて幼児教育の大切さが、ご理解いただけると思います。

時実博士の研究による第三章の11の図でも明らかのように、人間の脳の発達は誕生から三歳までに最も急激に伸び（だから「三つ子の魂」が強調されるのです）、次が六歳まで、そして十歳までに発達ほぼ完了すると言われます。ここで、面白い実験をしましょう。両手の平を広げ、一歳・二歳・三歳と指を折って数えてみてください。十歳までは両手の中に収まります。この間に、人間として個人的・社会的に生きていく上で必要なことは、しっかりと身につけなければならぬのです。

たものの、幼少期をオオカミ

は、このことを改めて自覚し、心して育ててもらいたいと思うのです。

(2) 十歳までは父母の両手の中で

生まれたばかりの赤子は、何も分かりません。お乳を飲ませ、食べ物を与えてくれる存在を自分の親と信じ込んで慕い、その一挙一動を真似るのです。人間の子として生まれても、オオカミに育てられれば「オオカミ少女」になるのです。このことから、改めて幼児教育の大切さが、ご理解いただけると思います。

十歳過ぎたら、両手の上

から大きく羽ばたかせよう

十歳過ぎ中学生までは両手の上で、それぞれの個性・能力・よさを見極めながら徐々に羽ばたかせる中で、個人として・家庭の一員として・社会人として生きていく上で、それぞれ個人差はありますが一応のめどとして、特に身に付けて置かなければならない次の事項を一つ一つ確認し、不足分は補い、過ぎたところは注意を促しながら、自立への基礎を見守り・育てていただきたい。そして、あなたの方の家族の・地域の・国の・更には人類の大切な宝として、中学校そして高校卒業段階で大きく羽ばたかせてもらいたいと思うのです。

【個人として】

- 1 朝必要な時刻に自ら起き、場に応じた心のこもったあいさつを交わし、「トートウガナシ」（感謝）の心が育っているか。
- 2 時間を守らせ、二度と帰らない「今」、そして「今日」を大切にしている心が育っているか。
- 3 小動物や花を育て、「命」や「生きる」ことについて語り、思いやりの心が育っているか。



与論中学校

るか。

4 その他、具体を通して語
る中で、親・祖先・教師・そ
の他の人々に対する感謝の心
が育っているか。

5 テレビ番組を選んで見る
ようにさせ、テレビに見られ
ずテレビを見る子に育ってい
るか。

6 本人の得意なスポーツを
支援し、「自分を知り相手を知
らば、百戦危うからず」「戦う
前に勝つ」「孫子の兵法」等
の勝負魂が育っているか。

7 生命の誕生や死、自然の
事物・現象の具体を通して、
人間の力を超えた神仏や自然

に対する畏敬の念や祈りの心
が育っているか。

8 中学校卒業までに、幾度
か体験するであろう小動物や
近親者の死を通して、死の意
味や生命の尊厳を感じ、命
のつながりを実感しているか。
※家庭(祖父母の協力を得て)

と学校が協力して

1 ソテツやアダン、葉・竹
や木の枝・流木などを使った
道具や作品を作らせ、巧緻性
や思考力・創造性が養われて
いるか。

2 親子・学校・友達で海や
プールに親しみ、泳力や遠泳
力を身に付け、海を自らのホ
ームグラウンドとして楽しん
でいるか。

3 郷土与論の先人が伝えて
くださった偉大なことわざ
「思イドウ運命」(念ずれば花
開く)の真意を伝え、その子
の特技・特性に基づく「将来の
夢」は育っているか。

4 「いただきます」の真意
を理解させ、食事を残さない
態度に加え、節電・節水・持
ち物に記名等の指導を通して、
命や物を大切にすること・食料
の命や他人に感謝する心は育
っているか。

5 「生き方の知恵」として

の郷土与論、その他のことわ
ざを伝え、理解させているか。

6 方言による伝説や昔話の
語り聞かせ・絵本や童話の読
み聞かせ・古典の朗唱・親子
読書・朝読書・自由読書等を
通して、学年相応の読書力を
身に付け、読書好きの子に育
っているか。

7 自分の生命・健康・安全
は自分で守ることの大切さを
自覚させ、麻薬やシンナー、
エイズ等性病の恐ろしさにつ
いて語り、その恐ろしさを感じ
得し実践意識が高まっている
か。

8 誠を島是とする郷土与論
に生まれ育ったことに誇りを
持ち、「誠の島宣言」の実践
化に努め、中学校卒業までに、
どこに生活しようとも、与論
の発展に尽くそうとする心情
(自ら「ふるさと税」を納入
する心情)が育っているか。

9 学年相応の宅習を習慣化
させ、進級や卒業までに、そ
の子の生き方の基礎である当
該学年までの基礎学力は身に
付いているか。

【家族の一員として】

1 家庭ではできるだけ方言
を遣い、墓参りその他の礼拝
を通して、祖先や神々を敬う

心が育っているか。

2 発達段階に応じた家事の
分担を通して、家族の一員と
しての自覚と責任感を育て、
家族一緒の生産活動や奉仕活
動を通して汗を流し、勤労の
つらさ・喜び・尊さを感じ得
せたか。

3 家族で性について語り、
正しい異性観や結婚観が身に
付いているか。

4 中学
校卒業ま
でに(与
論町弓道
連盟では
八月一日
前後の日
曜日)、家
族で一日
二食、三
食の断食
を断行
し、食事
のおいし
さ・有り
難さを実
感させ、家族で生きているこ
との意味や命について語り合
うことができたか。

【社会の一員として】

1 異年齢の友達と、いろい
ろな場で思い切り遊ばせ、ふ

『松陰の現代化』田中重著

本文 B5版 314頁

本価 2,300円

申込先 891-9301 鹿児島県大島郡与論町茶花32-1

与論町教育委員会

TEL0997-97-2441/FAX97-4196

るさとの良さを体得し、ふる
さと自慢ができるか。

2 法や決まり・約束事など、
守るべきことはきちんと守り、
自己反省(誠の真髓)が身に
付いているか。

3 地域行事や町民清掃・花
いっばい運動に進んで参加
し、奉仕の心や社会性・郷土
愛等が身に付いているか。

4 食材の命・その他諸々の
支えによって現在まで生かし
てもらっていることを自覚
し、今後どのような職業を通
して社会に貢献するかを考え
ているか。

5 そのことを基に、職業と
しての将来の夢を具体的に描
き、その実現のための進路を
自ら決定し、明確な目的意識
をもって高校に進学できた
か。

6 自然的・社会的逆境の中
で生き抜いて来られた郷土の
先人に感謝し、家持ち・島持
ち国持ち・世持ちしなければ
ならない自分の役割を自覚し
ているか。

7 携帯電話やインターネット
は、マナーを守り有効に活
用しているか。(詳細につい
ては資料①参照)

児童作文紹介

昨年（平成21年）が吉田松陰先生没後150年に当たり、様々な記念行事が行われた。私も松風会も山口県教育会と共催で「わたしの志」作文募集を行った。

今年度も引き続いて第2回の作文募集を行い、審査結果が公表され、先の下関市で実施された教育県民大会において表彰行事が行われた。募集の趣旨は「志」で、今年度は、特に松陰を唱っているわけではない。選には該当しなかったが、松陰を中心に書いた作文があり、松風会では4点を選んで紹介することとした。

わたしの志

萩市立明倫小学校

六年 岡崎 紀子

私の通っている明倫小学校では、毎日吉田松陰先生の言葉を朝に朗唱という形で勉強しています。これまで学んだ松陰先生の言葉で、特に心に残っているものが二つあります。

一つ目は、二年生の三学期習った

「朋友相交わるは 善導をもつて 忠告すること 固よりなり」という朗唱です。

この言葉の意味は、「友達と交わるには、真心を持って、善に導くようにすすめることは言うまでもないことである。つまり本当の友達ならば、悪いことをしている時、注意できるのが当たり前のことだよ。」という意味だそうです。

なぜ心に残っているかというと、三年生の時、担任だった大賀玲子先生がクラスの人がケンカをしている時や、自習時間にさわいだ人がいた時などに、ど鳴り付けるのではなくこの言葉をくり返し、くり返し言って、みんなが仲良く、まじめに勉強するようにと、やさしく教えてくれたからです。私は、クラスの子がさわいでいた時、悪いことをしているのを気付いてはいるけど、きらわれるのがいやなので注意することはありませんでした。でも、本当の友達だったらやはり注意するべきだと思いました。それで私は、この言葉が好きになりました。

もう一つの私が好きな言葉は、六年生の一学期に習った「体は私なり 心は公なり 私を役にして公に殉う者を大人と為し 公を役にして私に殉う者を小人と為す」です。

この言葉は、「人間は精神（心）と肉体の二つを備えている。そして、心は肉体よりも神（神性）に近いが、肉体は動物に近い（自己本位）、肉体のために、精神を後回しにするのは小人（徳のない人）、逆に肉体（私）を後回しにして、徳を修め、道を行うことに心がける者は大人である。」という意味です。



吉田松陰座像（明倫小学校蔵）

この言葉が心に残っている理由は、よく六年生の算数の田中正己先生が、「いつも、私つまり自分の事を後回しにして公、すなわち皆のことを優先して考え行動しなさい。」と、やさしく声をかけてくれるからです。

私の志は去年、「自分のためだけでなく、周りの人のことも考えられるような親切な人になりたい」と、書きましたが、今年は親切の意味が少し自分

の中で変わってきました。去年は親切というのは、みんなが仲良く笑っているようなものと思っていたが、今は本当の友達だったら友達が悪いことをしていたら、当たり前のように注意できるようになることが親切だと思うようになりました。それで、このような「親切な人間」になりたいです。

未来に続く志

萩市立明倫小学校

六年 小埜 利采

松陰先生の願い、それは、「志を持って人生を進んでいってほしい」という言葉。

現在の私達は松陰先生のこの願いのように、志を立てそして、それを実現させるために努力しているのでしょ

か。私自身は、志の意味を理解して、その志に向かって努力して行くことはいです。いつも、途中でやめてしまいます。しかし、そんな私でも、松陰先生の次の言葉を知り、がんばろう！と思いました。その言葉とは、

「志を立て それを貫くことこそ 人間の最も大切なこと」

松陰先生が生きていく上で最も大切



明倫館額（明倫小学校蔵）

にしていたのは志です。実際、松陰先生の「実行」と志が多くの若者を羽ばたかせました。

野山獄に幽閉され、約一年がたった松陰先生は、松下村塾を開きました。松下村塾からは、私達も知っている人材が多く出ました。

高杉晋作や久坂玄瑞、吉田稔麿など明治維新を見ることなく命を落とした若者も多くいます。彼らは松陰先生のことを、すばらしい人だと尊敬していました。私が思うのは、松陰先生は言葉だけでなく、志を立て自ら実現させるためにがんばる人だったから尊敬

されるということです。

松陰先生は最期、弟子達に遺書を書きました。それには、

「私は三十歳でこの世を去るが、同志が私の志を継いでくれるなら、それが種となつていつか再び実るだろう」と、書かれていました。

私は自分の志を立てました。その志とは、将来薬剤師になり、病気で苦しんでいる人達のため、新しい薬を開発していくということです。

松陰先生のことば

萩市立明倫小学校

六年 中坪

令

もともと松陰先生のことを知りたい。それが今の僕の目標であり志です。

五年生の時に「志を立ててもって万事の源となす」を中心にして作文を書きました。

きっかけは、「松陰」のミュージカルに参加したことで、先生の生き方に心を打たれたからです。ミュージカルの中では、大次郎の役をさせてもらいました。

萩で二回、山口で一回、東京で一回、下関で一回やりました。みんな大成功

で、観客も演技者も、感動していました。涙を流している人もいました。不思議な感動でした。

『耳を飛ばし 目を長くして いざゆかん 我ら情報にん者…』この言葉が何回も歌われ、ミュージカルの中心になりました。

よし、この言葉について調べるぞと目標を持ちました。

分かったことは、先生は、五年間で一万三千キロメートル、九州の平戸から長崎、会津、佐渡、そして青森まで、日本全国を歩かれました。途中で佐久間象山や多くの学者と出会って、たくさん情報を集められたということでした。

でも、国の決まりを破られたので、江戸で処刑されました。

あれから百五十年も過ぎたけど、萩の人はもちろん、日本中の人たちが松陰先生の教え方や考え方をほこりに思っています。

ミュージカルをやって分かったことは、先生は、いつも志を持っている人だということでした。

先生の志は、「至誠にして動かざる者は未だ之あらざるなり」明倫小の朗唱文の中にもある言葉です。六年になってこの意味がだんだん分かってきました。「どんなことでも一生けん命やれ

ば、必ず出来る」ということだと思いました。

僕はこの言葉を大事にして、国のため、人のために行動した人のことを調べて、自分の考え方を深めていくことに努力します。

僕はどうしても自分の考えに自信が持てないことがあります。

でも僕にだってやれる事があります。それは大きなことでも、小さなことでも一生けん命にやればいい、そんな気持ちが大きくなってきました。

その第一歩は、松陰先生ことを調べることです。

そのためにも、いろんなことに興味を持ちながら、歴史大好きなことを力

吉田松陰先生講学の跡（明倫小敷地内敷地内）



にして、萩のことをもつと調べていきます。

だから輪島との交流市民号にもさんかさせてもらいました。

『耳を飛ばし 目を長くして いざゆかん 我ら情報にん者…』この言葉の元である飛耳長目という言葉も知りました。

僕はどこに行っても「至誠にして…」この言葉と「飛耳長目」を忘れないことを志にします。

松陰先生に教えられたこと

萩市立明倫小学校
六年 山縣 彩香

明倫小学校では、毎朝一年生から六年生まで、松陰先生の言葉を朗唱しています。

「人賢愚ありといえども、各々一二の才能なきはなし…」この言葉は三年の時の朗唱文です。私の心の支えになっています。

三年生の時、担任の先生から与えられたアドバイスをもとに、六年生になった今でもずっと続けていることがあります。児童作家になることです。作家になることを目指していろいろな本を読み、頭にうかんだ事や、生活の中

で起こった出来事などについて、主人公を作り、話を考えています。

ある日、赤い封筒が届きました。なんと、私の大好きな作家さんのあんびるやすこ先生からのクリスマスカードでした。うそつ、えつ、すぐくうれしい！と喜びました。これまで何度も、小説家になるのをやめようかと思っただけど、カードをもらったことでやっぱり書こう！と思いました。

松陰先生の言葉に「志を立ててもって万事の源となす」とありますが、何事をするにも志を立てることが一番であることがわかりました。

松陰先生のことをもつと知ろうと至誠館（松陰神社）に入ってみました。館内に入ったとたん、江戸時代にタイムスリップしたような気がしました。私が一番おどろいたのが、すでに十歳から殿様の前で教えていたことです。その時、私は三年生と思うと、松陰先生はそのころからすつごく頭が良かったんだなと感心しました。あと、毛筆で書かれたいろいろな書物の数々。特に二十五歳の時海外に渡ろうとして失敗し、萩の野山ごくに送られた時の先生の行動でした。たくさん読書をされ、囚人やかん守にまで勉強を教えている姿、処刑される時の様子、私にはとうてい考えられないことばかりで、

先生のすごさに感動でいっぱいでした。

百五十年たった今日でも、先生の志を生徒が唱え、一人ひとりの心にきざみこまれていきます。今はよく理解できなくても、成長しある時、何をすればよいか迷った時の答えになると思います。

私は志の一つにこれをつけ加えます。それは、

「朋友相交わるは 善導をもつて忠告すること 固よりなり」の言葉です。私の心の中にある友達へのかかわり方です。このことは作家になろうとがんばっている自分のとつて、とても大切なのだと知りました。なぜなら物を書くためには、相手の気持ちを理解しなければならぬからです。

真心をもつて、相手に接すること、この先生の言葉で常に行動していきたいと思えます。

これから先、松陰先生の言葉から学んだ朗唱を忘れず、時には先生の言葉をはげましにして、どんなことがあっても夢をあきらめず進んでいこうと思います。

松陰研修塾2年次(23年度)予定 自由にご参加を

- 1回 23 06 25(土) 山口県教育会館
- 1 「講孟余話」
- 2 「武教全書講録」
- 2 松陰関係史跡を訪ねて
- 4 「孫子評注」

- 2回 23 08 27(土) 山口県教育会館
- 1 「東北遊日記」
- 2 「土規七則」
- 3 「福堂策上下」
- 4 「将及私言」「大義を議す」

- 3回 現地研修 23 10 29(土)〜31(月)
- 2 泊3日
- 松陰ゆかりの地巡検(青森県弘前、津軽方面)

- 4回 書簡・その他 23 11 26(土)
- 1 「妹千代宛」書簡
- 2 「家族」との書簡
- 3 名字説、送序
- 4 「黙霖・月性」等との書簡

- 5回 書簡・その他
- 24 01 28(土) 山口県教育会館
- 1 「家大人・玉叔父・家大兄に上る書」
- 「涙松集」「縛吾集」
- 2 座談会 「松陰を学んで」
- 3 「留魂録」
- 参加申込先…松風会へ

至誠の人・

吉田松陰先生の

座像について

(財)松風会理事

折本章



「吉田松陰座像」を前に、学習者にどのように説明をしたらよいのでしょうか。松風会理事折本章氏に、その一つのモデルを書いていただきました。

この座像は、山口県が誇りとする萩市出身の吉田松陰という人です。松陰先生は今から180年前の1830年、杉家の二男として寅年に生まれ、幼名を虎之助と名づけられました。杉家は小高い丘の木々に囲まれた小さな一軒屋で、周りには人家は全くありませんでしたが、小鳥の清らかなさえずりや美しい草木の自然の移り変わりが、幼い松

陰先生の心をなぐさめ清く大きく育ててくれました。生涯にわたって、誠、天の声、魂の声に従って生き続け、不義や恥な行為を最も嫌いました。貧乏で武士としての身分も

低く、萩藩から頂く給料だけでは生活ができませんでした。そのため、一家は田畑を耕して作物を育て、武家でありながら農家と変わらない生活をしました。幼い兄弟も、朝早くから父母と一緒に田畑に出かけました。家は粗末なかやぶきで、小さな家に10人ぐらの家族が仲良く住んでいたもので、机についてじつくりと勉強することなどできませんでした。

松陰先生兄弟の勉強部屋は田畑でした。父は出かける前に「本を忘れるな」と兄弟に声を掛けました。父が農作業をしながら、論語という本の一文を声高らかに唱えようと、兄弟はその後を繰り返します。こうして勉強を続け、武士としての教養はすべて田畑で身に付けました。貧乏など少しも気にすることなく、清く強く正しく生きていきました。座像の右袖が少し下がっているのは、いつも書物を入れていたからです。

松陰先生は6歳で兵学師範

である吉田家の養子となり、兵学の先生として叔父から厳しい教育を受けました。満10歳の時、藩主の前で兵学の講義をし、藩主を感動させました。藩主からとてもほめられて、松陰先生の名は萩全体に知れわたったり、神童と言われるようになりました。その後も2年ごとに講義をして毎回藩主にほめられ、兵学書などいろいろな褒美を頂きました。

20歳になった松陰先生は、さらに広く深い学問を求めて長崎、江戸、東北などに遊学します。24歳の時、ペリーの率いる黒船に乗ってアメリカに密航しようしますが、ペリーに「自由に行き来できる日がきつとくるからそれまで待ちなさい」と説得され、止むを得ず密航をあきらめて自首します。萩藩は松陰先生を獄に入れました。

獄中で仲間と勉強会を開き、自暴自棄になっていた獄の仲間を次第に人間らしく変えていきます。この貴重な経験が、やがて松下村塾の教育へと発展していきます。村塾では、知識の積み重ねよりも、勉強の意欲、態度、方法、志、気迫などを重視して、自分で自分を高める自己教育力を深めていきました。さらに自分な

りの考えを形成し、人民や国家のために尽そうとする精神を養っていききました。これが日本のあけぼのである明治維新の成就に、長州から多くの優秀な人物が出た要因となりました。

国の行く末を心配する松陰先生は、幕府の政治に我慢できなくなり、言動が次第に過激になっていきます。萩藩はそれを見越すことができなくなり、ついに松下村塾の閉鎖を命じて再び松陰先生を獄に入れます。しかし、獄に投じられて志を失う松陰先生ではありませんでした。獄中から塾生に過激な文章を送って、幕府の政治を改めさせようとした。

そうした過激な幕政批判は幕府にも伝わり、ついに幕府から「松陰先生を江戸に送れ」という命令が届きました。幕府の裁判所で取調べを受けた後、江戸の伝馬町の獄に投じられます。1859年10月27日、首をはねられ波乱に富んだ29歳の生涯を閉じます。松陰先生は首を斬られる前に、鼻をかみ、役人にお礼を述べ、自分から血だまりの石に首を差し出して処刑されました。首を斬り落とした首切り役人は、潔い実に立派な最期であ

ったと伝えていきます。

門人には「身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂」の和歌で始まる『留魂録』を獄中で書き残しました。その中に、「自分が死を恐れず堂々と死ぬことができたのは、日ごろの学問の力である」という一文があります。父、兄、叔父宛には、次のような書き出しの遺書を送りました。「平生の学問浅薄にして、至誠天地を感格することでき申さず、非常の変に立ちいたり申し候。さぞさぞ御愁傷も遊ばさるべく拝察つかまつり候。親思ふところにまさる親ごころ。けふの音づれ何と聞くらん(子である自分が親を思う心の何倍も子と思う父母は、自分が死んだという知らせをどのような思いで聞くであろうか。それを思うと胸が張り裂けそうである)」松陰先生の死を以ての教育は、門人の心を奮い立たせ、長州から偉大な人物を輩出させました。松陰先生「き後も、門人は互いに励まし合いながら一生懸命に勉強し、より良い国を造るために命を掛けて働きました。今日の平和は、こうした人々の卓絶する努力の上に築かれたものであることを忘れてはなりません。」